

| | |
|---------|--|
| 氏名 | 梁 姫淑 |
| 学位の種類 | 博士（学術） |
| 学位記番号 | 博文化甲第19号 |
| 学位授与年月日 | 平成26年3月24日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第3条第3項該当 |
| 学位論文題目 | 張赫宙戦後研究 ―終戦から帰化まで― |
| 論文審査委員 | 委員長 教授 杉浦 晋 委員 教授 権 純哲 委員 准教授 小谷 一郎 委員 教授 武井 和人 |

論文の内容の要旨

本論文は、朝鮮出身ではあるが大部分の作品を日本語で書いた作家張赫宙（1905~1997）の、太平洋戦争終結（1945）から日本への帰化（1952）前後に至る時期を考察している。

以下、具体的に内容の要旨を記す。

第一章では、終戦直後における書誌的考察を中心に、在日朝鮮人民族団体から「新生」の条件として自己批判を求められた張が、戦前の親日行為をどのように認識して行くのかを自伝的小説「民族」（1946）の作品分析を通して考察した。

終戦直後の日本では、国民生活を悲惨な状況に陥れた責任者の戦争責任追及に熱心であり、知識人らが侵略戦争に巻き込まれ、協力してしまったことを、主体性の弱さとして反省し、日本の近代文学の歴史を批判的に検討する作業に取りかかっていた。このような社会状況の中で、張は「民族」を書いて、植民地期における主体性の弱さを告白し、自己批判をも重ねていた。しかし、このような自己批判と反省は、「民族」以後の作品には見られない。「民族」以後の作品は、終戦直後における様々な人間像（日本人）を描いたものが多く、1949年、朝連がGHQによって解散させられるまで、張は、あえて朝鮮や朝鮮人に対する執筆や発言を自ら封じていたのである。金達寿や許南麒などの在日朝鮮人文学者が、戦後、在日朝鮮人民族団体や新日本文学会に所属して、朝鮮民族の権利獲得や民族教育の普及などの民族運動に携わっていたのと違って、張は、終戦から約二年も過ぎないうちに、自ら民族に帰り得る「新生」の道を諦めて、日本人作家として生きて行くことを選んだのである。

本章では、終戦直後における張赫宙の執筆活動を手掛かりに、それが他の在日朝鮮人作家（金達寿、許南麒）とどのように違っていたのかを比較検討して、

「戦後の出発」における張の固有性を確認した。

第二章では、終戦直後における張赫宙と在日朝鮮人との関わりを検証し、その関わりの中かで抱いた不満と反抗心が、主に 1949 年と 1952 年に活字化されていたことを確認した。この時期には、吉田政府による在日朝鮮人の取締りが厳しくなっており、マスコミもほとんど取り締まる側の立場に立って、朝鮮人が関わった事件を、犯罪として大きく報じていた。このようなマスコミの朝鮮人攻撃に、自らの不満と反抗心を重ねて手助けをしたのが、張赫宙であった。張がマスコミを通して主に語った内容は、戦後在日朝鮮人の暴力と思想の問題を批判的に論じて、朝鮮人の無条件の自粛を求めるものであった。すなわち、マスコミの側からすれば、朝鮮人インテリである張を招いたことによって、在日朝鮮人の取締りに根拠を与える効果が得られたことになる。

張は、そのような文章を書いたのは「同胞の身に災いなかれ」という「朝鮮の心」もあったと言う。しかし、戦前から抱いていた朝鮮人としての後ろめたさ（劣等感）、或いは戦後の関わりによる在日朝鮮人に対する不満と反抗心が心の壁になって、結局張には、自民族に自らを完全に同一化することはできなかったことを、本章を通して確認することができた。

第三章では、自伝的小説「脅迫」（1953）の主人公「私」と張の自己認識の過程を重ねることを通じて、終戦直後から「帰化」に至るまでの自己認識の中かで現実的な不安がより深い実存的不安に変わっていく過程を考察した。

終戦後、朝鮮人としての民族性と、それを語る資格に欠けていることを自覚した張に、残されていたのは日本語であった。日本語を用いることで、戦前以来の「日本の心」の追求の延長線上に、もはや「翻訳的小説」の水準にはとどまらない、「私の文学」が可能になるはずであった。彼にとっては、これが実存的不安から逃れるための唯一の希望だったのである。そして、この希望を実現したいという思いが、1948 年頃から急増した児童向け著作の執筆に繋がったと考えられる。

第四章では、戦後における児童文学界の状況を踏まえて、1948 年頃から急増する張赫宙の児童向け著作の内容を検討した。さらに、張が児童向け著作を通して目指そうとした文学的可能性と、「春香伝」翻案を通して見られる「新しい文学」への志向性について考察した。

張の児童向け著作には、戦後の再出発をテーマにしたものや、児童たちの関心を反映した読物が多く見られる。このような児童向け著作の背景には、あきらかに戦後児童文学界における新しい欲求と、それを支える大衆雑誌出版産業の地盤があったといえよう。つまり、そういう商業ジャーナリズムによって、終戦後、政治と文学論争が展開された大人の文学界で仕事をもらえなくなった張が、短期間において多数の児童向け読物を著作することができたのである。

しかし、張は単純に金銭的報酬だけを執筆の目的にしたのではなかった。言い換えれば、彼はその営みを通して、「私の文学」が生まれ変わることを強く望んでいたのである。

戦後、作者としての立場に危機感を抱いていた張にとって、「私の文学」に対するあり方を再確認し、新しい自己を見出していくことは、再出発に向ける必然的な行為だった。そのような意味で張の児童向け著作は、戦後における張赫宙の再出発の文学として位置付けることができるのである。

第五章では、『嗚呼朝鮮』（1952）に関する同時代評を丁寧に読み直す作業を通して、朝鮮戦争を形象化した『嗚呼朝鮮』が孕む問題を考察した。

朝鮮戦争を形象化した『嗚呼朝鮮』は、当時の日本にあまり伝わらなかった時事的事件を多く描いており、その中でも韓国政府や軍の不正・腐敗に対する叙述が目立っている。それは、張のジャーナリスト的姿勢によるものと言っても過言ではないが、同時にそのような知られていない事実こそ、朝鮮民族を幾重にも苦しめる「祖国朝鮮の真実の姿」である点を考えると、作者の訴え（怒り）は、やはり同胞に対する愛情から発したと言える。

しかし、主人公の希望が絶望に変わる後半部をみると、当時における時事的問題（巨済島捕虜暴動事件）を取り上げているので、読者の関心を引くには十分な展開であると言えるが、祖国や同胞に対する作者の愛情は感じ取れない。つまり、『嗚呼朝鮮』の後半部におけるストーリーの転換（希望→絶望）からは、執筆時における作者の微妙な立場による（祖国に対する）愛情のゆれが見えてくるのである。

第六章では、二度目の朝鮮取材以後に書いたルポルタージュや小説を通して、当時の張が祖国の惨状をどのように見つめていたかを検証した。さらに、『無窮花』（1954）の内容分析を通して、張が最も危惧していた「民族の哀しみ」を探ると共に、この作品を通して作者が同胞に伝えたかった真のメッセージを考察した。

張は二度目の朝鮮取材を通して、生活のためにモラルを失っていく女性や怨恨の裏返しによる民族性の崩壊など、数々の不幸を目の当たりにして、民族を不幸に追いやる最大の「民族の哀しみ」は、ほかならぬ民族の「激烈な性情」にあると考えた。このような考えは、人民軍の看病に携わりながら「みんな同胞で、祖国の幸せを願はぬものはあなかった」と、さらなる同胞愛に目覚めていく玉姫を通して、同胞としての連帯感と同胞愛を呼び掛けていたのである。即ち、『無窮花』には、祖国の平和を祈りながら、祖国を離れていく者の切実な思いが込められていたのである。

結章では、「おわりに」を兼ねて、帰化後の自伝小説の内容を分析した。帰化後に書いた自伝作品には、朝鮮の家族（主に母親と前妻）に対する不満と、憐

憫の情が入れ交じった叙述が目立っており、芸者の私生児として生まれた自分の生い立ちを恨み、母親と、年上の妻に対する精神的苦悩を描き出す場合が多かった。

さらに、『遍歴の調書』(1954)と「異俗の夫」(1958)では、妻の国に同化しようと長い間努力してきた主人公(「私」)が、「抗し難い血の宿命」や、習慣としてつきまとう「民族の残滓」に悩み続ける様子が描かれている。このような自伝小説には、帰化して「民族」という作家としての特徴を失って、下り坂になってしまった張赫宙の不安な心情が反映されており、作者はそのような自分の不幸な人生を文学に生かして、新たな作家的特徴を作り出して行こうとしたと考えられる。しかし、そのような試みは、却って「弁明」と愚痴として受け取られる場合が多く、張は、帰化以前のような世間の注目を集めることはできなかった。

最後に、本論文の目次を記す。

序章

はじめに

- 一. 張赫宙の生涯と日本語作品
- 二. 先行研究
- 三. 研究目的

第一章 戦後の出発

はじめに

- 一. 「日本の国民に訴ふ」
- 二. 親日行為に対する弁明—「民族」
- 三. 在日朝鮮人文学者の嚆矢—金達寿
- 四. 民族の戦いを歌い上げる—許南麒

おわりに

第二章 在日朝鮮人民族団体との関わり

はじめに

- 一. 戦後の歩み
- 二. 在日朝鮮人との関わり
- 三. マスコミによる朝鮮人攻撃と張赫宙
- 四. 心の相剋とその行方

おわりに

第三章 実存的不安をめぐる作者の軌跡—「脅迫」論

はじめに

- 一. 現実的不安と内的不安

- 二. 自己認識①—「弱気な自分」
- 三. 自己認識②—「母国語を持ってない異質な自分」
- 四. 実存的不安へ
- 五. 新しい文学への挑戦—児童向け著作

おわりに

第四章 日本語への回帰—「私の文学」を求めて

はじめに

- 一. 占領下の児童文学
- 二. 張赫宙の児童向け著作
- 三. 児童向け著作における新しい興味性（可能性）
- 四. 「新しい文学」の志向性

おわりに

第五章 祖国に対する愛情のゆれ—『嗚呼朝鮮』論

はじめに

- 一. 執筆背景及び同時代評
- 二. 祖国朝鮮の真実の姿
- 三. 変えられた結末
- 四. 愛情のゆれ

おわりに

第六章 祖国を離れる者の願い—『無窮花』論

はじめに

- 一. 朝鮮取材とルポルタージュ
- 二. 「民族的哀しみ」の本質
- 三. 「無窮花」と「毒の花」
- 四. 祖国を離れる者の願い

おわりに

結章

- 一. 帰化後の自伝小説について
- 二. 習俗として残る民族の残滓—「異俗の夫」
- 三. おわりに
- 四. 本論文の成果と課題

初出一覧

参考文献

張赫宙戦後著作年譜

論文審査の結果の要旨

学位論文審査委員会は、当該論文の発表会を2014年2月21日に公開で開催し、質疑をおこなって、論文内容を審査した。

本論文の研究成果の概要は、以下の通りである。

まず、先行研究に目を向けるならば、これまでの張赫宙論の多くがおもに戦前の活動を取り上げてきたのに対し、本論文は戦後に注目している点に意義がある。また、戦後についてのわずかな先行研究も、ほとんど個別の作品論の範疇に留まるものであり、本論文のように時代背景をふまえた通時的な考察には至っていない。

以下、章を追うかたちで本論文の内容に言及する。

第一章は、敗戦直後に書かれた短篇「日本国民に寄せる」(1946)、「民族」(同)を取り上げ、張の戦前の親日行為に対する弁明のありようを述べたうえで、同じく在日朝鮮人文学者である金達寿、許南麒との比較を通じて、戦後の出発期における張を考察する。特定の団体に属し、政治運動や民族運動に傾いた文筆活動をおこなった金、許に対して、それらへの違和感を覚えざるを得なかった張の独自性を、確かに浮かび上がらせている。

第二章は、張と在日朝鮮人民族団体とのかかわりを詳細に論じる。まず、そのかかわりのなかで抱いた不満と反抗心の表白が、在日本朝鮮人連盟の解散(1949)と外国人登録法の施行(1952)を契機としていたことに注目し、結果的に彼の表白が、日本政府やマスコミによる朝鮮人攻撃を裏付ける役割を担ったことを跡づけている。そして、彼の内面における「朝鮮の心」と「日本の心」の相克が、後者の優位に帰結し、帰化に至った過程を、そこに重ねて述べている。

第三章は、自伝的短篇「脅迫」(1953)を題材に、張の帰化に至る内面の過程をいっそう詳細に分析している。それを様々な迫害に対する現実的不安と、より根源的な実存的不安との二層に分けてとらえ、前者が帰化を必然とし、そして後者から解放されんとする衝迫が、「私の文学」＝「日本の心」を希求する張の営為、具体的には児童向け著作の執筆につながっていったとみなしている。

第四章は、その児童向け著作の数々を取り上げる。就中、朝鮮の昔話「春香伝」の翻案「鈴慕のしらべ」(1949)が、日本の平安時代を舞台とするよう改作されている点に、「朝鮮の心」と「日本の心」が融合した「私の文学」を希求する張の営為の典型を認めている。

第五章は、朝鮮戦争に取材した長篇『嗚呼朝鮮』(1952)を題材に、祖国の悲劇に直面した張の内面の振幅を述べる。すなわち、韓国政府や軍の不正など時事的内容を多く取り入れた物語の構成に、「祖国朝鮮の真実の姿」を世界に訴え

ようとする祖国愛を認める一方で、南（韓国軍）北（人民軍）どちらにもけっして同調しようとしぬ主人公の姿に、祖国の悲劇から距離を取ろうとする張の「厳正中立」の決意をみいだしている。そして、この『嗚呼朝鮮』の発表から5ヶ月後、張は自らの帰化を公表したのである。

第六章は、やはり朝鮮戦争に取材し、帰化後に筆名を改めて（野口赫宙）はじめて発表した長篇『無窮花』（1954）をおもな題材に、張が同胞に伝えようとしたメッセージを考察する。『無窮花』は、人民軍支配下に置かれた大家族の構成員が次々と離散してゆくなかで、祖父の魂を祭る「祠堂」と家を守ってゆく少女玉姫を描いている。この彼女を見舞う過酷な運命の深奥には、民族を不幸に導く「激烈な性情」が存し、一方、彼女のふるまいには、同胞愛につながる「緩和な心」が存している。すなわち、この「緩和な心」の主張にこそ、祖国の平和を願いながら、祖国を離れてゆく張の切実な願いが込められているとみなしている。

結章は、『遍歴の調書』（1954）など、帰化後に書かれた一連の自伝的小説などを題材に、張の帰化が「心の相克」の終焉ではなく、根拠なき自己の根拠の確認に向かう果てしない彷徨の始まりであったことを述べている。

以上のうち、第二、三、五章は、それぞれ独立した論文として査読付きの学術雑誌に発表され、既に一定の評価を得ている（第二章「社会文学」、第三、五章「昭和文学研究」）。第三章の内容に基づいては、審査付きの学会発表も行っている（昭和文学会）。付表の「張赫宙戦後著作年譜」も、本学の紀要「日本アジア研究」に発表済みである。

総じて本論文の意義は、太平洋戦争終結から日本への帰化前後に至る時期の張の歩みを、在日朝鮮人団体の動向といった時代背景をふまえて論じきった点にある。併せて「張赫宙戦後著作年譜」も、今後の研究に資する基礎的研究として大きな意義を持つ。

もっとも疑問点がないわけではない。質疑においては、方法論的に、本論文は「作家論」「作品論」「状況論」のいずれであるのか、という疑義が提出された。また、本論文の研究史的意義について、論中でいっそう明確に述べることが求められた。さらに、部分的な記述については、張の児童向け著作の発表を、「私の文学」＝「日本の心」を希求する営為としてとらえるのであれば、それが帰化直前の短期間で終わっている点にも論及すべきであった、張の帰化の意義を十分に考えるためには、帰化後に発表されたミステリーやルポルタージュにも触れる必要があった、といった指摘がなされた。

しかし、これらの点は、本論文の完成においてはじめて今後の課題として浮上してきたものであり、その画期的な意義を逆方向から照明するものに他ならない。

以上をふまえて、最終的に学位論文審査委員会は、本論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいと判定した。

以上